

## 編者序文

### セラピストとしてのフロム

エーリッヒ・フロムは、セラピストとして多くの人にその名を知られた。実際、フロムは五十年以上も精神分析を実践していたのである。そのうち四十年以上、ニューヨークやメキシコの精神分析家養成機関においては、教師として、スーパーヴァイザーとして、また大学講師として活躍した。フロムと精神分析の作業に関わった人は誰しも、その並外れた共感能力、親密さ、そして他者とのストレートな関わり方に触れることができたが、それだけでなく、その真理探究者としての厳しさ、忌憚<sup>きたん</sup>なき批評を浴びせる同僚としての一面をも垣間<sup>かいま</sup>見ることができた。

フロムはたびたび、彼独自のセラピーの方法について、著書を出版しようと計画したが、計画はついに実現しなかった。それゆえ、彼が目の前に座っている患者とどのようなやり取りをしたのか、また訓練中の分析者や同僚とどのようなやり取りをしたかについての報告は、歴史的な資料として価値がある。真っ先に挙げられるのは次の文献である。R. U. Akeret (1975). G.

Chrzanowski (1977, 1993), R. M. Crowley (1981), D. Elkin (1981), L. Epstein (1975), A. H. Feiner (1975), A. Gourevitch (1981), A. Grey (1992, 1993), M. Horney Eckhardt (1975, 1982, 1983, 1992), J. S. Kwawer (1975, 1991), B. Landis (1975, 1981, 1981a), R. M. Lesser (1992), B. Luban-Plozza and U. Egles (1982), M. Norell (1975, 1981), D. E. Schecter (1971, 1981, 1981a, 1981b), J. Silva Garcia (1984, 1990), R. Spiegel (1981, 1983), E. S. Tauber (1959, 1979, 1980, 1981, 1981a, 1982, 1988), E. S. Tauber and B. Landis (1971), E. G. Witenberg (1981), B. Wolstein (1981).

また、フロムがメキシコで教えた学生が書いた論文が、一九六五年から一九七五年までの *Revista de Psicoanálisis, Psiquiatría y Psicología* に、それ以後はフロムの創設したメキシコ精神分析研究所の出版物 (*Memoria Anuario*) に掲載されている。上記の業績をもとに、そして一部フロムの未刊行の草稿をもとにして、以下のような論文が書かれている。M. Bacciagaluppi (1989, 1991, 1991a, 1993, 1993a), M. Bacciagaluppi and R. Biancoli (1993), R. Biancoli (1987, 1992), D. Burston (1991), M. Cortina (1992), R. Funk (1993), L. von Werder (1990).

フロム自身が出版したもののなかで、精神分析的セラピーに関して論じているものと言え、即座に思い浮かぶのは、夢の理解に関する一章 (E. Fromm, 1951a 所収)、「フロイトの「少年ハンズの症例」に関する小文 (E. Fromm, 1966k)」、「セラピー的・技法的問題に関する省察 (E. Fromm, 1979a に散見される)」、「E. Fromm, 1990a, pp. 70-80 の「精神分析的セラピーの修正」のなかにもある) などが

であろう。リチャード・エヴァンズ (Richard I. Evans, 1963) のフロムとのインタビューは、フロムのセラピー観に関わる問題に触れており、英語、イタリア語、その他の言語でも出版されているが、これはフロムの意に反してエヴァンズが出版を進めたものである。それは「私〔フロム〕の判断するところでは、私の著作を深く理解するにはまったく役に立たない」し、「著作への入門にもならなければ『概観』にもならない」。そのようなわけで、エヴァンズのインタビュー記録は、資料としては役に立たない。セラピーの方法に関してフロムがこのインタビューのなかで述べたことの一部は、「エヴァンズによる修正を避けるために」一語ずつテープから起こされて、本書のなかに収められている。

### 精神分析に技法は存在しない

本書に収められることになった死後出版のテクストは、精神分析的セラピーに関する教科書とはならない。また、いわゆる精神分析の技法テクニクのフロム流の解説書などというありもしない本の代用品でもない。フロムが精神分析的セラピーに関する教科書を書かなかったということ、そしてセラピーの流派を彼自身は打ち立てなかつたということは、偶然の一致ではない。フロムのセラピーの方法に個性ある部分があつたとしても、それは「精神分析的技法テクニク」としてひとくくりされるようなものではない。精神分析家は、セラピーを提供するための「ノウハウ」

の後ろに隠れることはできないのである。

本書は、精神分析的技法に関する情報を提供するようなものではない。フロムは実際、精神分析的技法について書かれた教科書の主張に反して、そもそも技法テクニクなどというものは存在しえないと考えていた。にもかかわらず、本書に収められたテキストから、セラピストとしてのフロムについて、また現代人の心の悩みへのフロムの対処法について情報を得ることはできる。フロムのセラピーの方法の特徴は、冗長な理論や抽象概念にあるのではないし、鑑別診断によって「患者の人格」を「陵辱レイプ」するところにあるのではない。そうではなく人間の基本的問題を、個別に、それぞれ独自のものとして見て取るその能力こそが、フロムの特徴なのである。患者に対する考え方や処置の仕方には、フロムの人間主義的精神ヒューマニズムがしみ込んでいる。患者は敵対者とは見なされない。患者だからといって、根本的に異質な人間だと思つてはならない。よく見れば、分析者と被分析者の間には、深い連帯が存在するのである。分析者というものは、当然のことながら、自分自身をどう扱うかを学んできた人間であり、これからも進んで学ぼうとしなければならない。「精神分析的技法テクニク」の陰に隠れることがあつてはならない。分析者とは自分自身の第二の患者であり、そのような分析者を分析するのは、むしろその患者なのである。フロムが自分自身を真剣に受け止めているからこそ、患者をも真剣に受け止めることができる。患者によって自らのうちに引き起こされる逆転移反応を通じて自己分析しているからこそ、フ

ロムは患者を分析することができるのである。

### 本書の構成

本書に収められたテキストは、手書き原稿の形で残されたものではなく、講義、講演、インタビュー、セミナーの録音を文字に起こしたものとして英語で残されていた。それらのテキストは通常、原稿なしに話されたものであり、出版は今回がはじめてである。そこで、私はその語り口調をそのまま残すようにした。最後の一章を除けば、テキストを分割して並べ、見出しを選択したのは、つまり付け加えたのは私である。それ以外の重要な補足は、テキストのなかでは「」でくくっておいた。英文のテープ起こし原稿は、エーリッヒ・フロム文庫で閲覧することができる (Erich Fromm Archives: Ursraier Ring 24, D-72076, Tübingen, Germany)。

本書の第一部のタイトルは、「分析的治療において患者に変化をもたらす要因」と題されている。そのもとなつたテキストは、フロムが一九六四年九月二十五日にニューヨークのウイリアム・アランソン・ホワイト研究所<sup>\*</sup>の新しい建物の落成式の折に、ハリー・スタック・サリヴ

\* ウイリアム・アランソン・ホワイト研究所 (The William Alanson White Institute) は、フロムやハリー・スタック・サリヴァンらによって一九四六年にニューヨークに設立された精神分析家養成のための教育研究機関。特に、それまでの精神分析に対して、社会や文化との関連を重視することをうたっている。

アン協会で行った、「分析的治療において患者に変化をもたらす原因」という講演である。この講演はとりわけ重要である。というのも、フロムはそこで神経症の良性と悪性とを区別し、精神分析的治療の限界を極めて明快に示したからだ (E. Fromm, 1991c も参照)。この講演の一部はすでにそのなかで公表されている。

第二部（「精神分析のセラピーとしての側面」）に収められているのは、一九七四年にロカルノでフロムがバーナード・ランデイスとともに、アメリカの心理学の学生のために三週間にわたって行ったセミナーの抄録である。その後の数年間にわたって、フロムの秘書であるジョーン・ヒューズは、録音に基づいたセミナーの記録原稿を作成した。それは四百ページにまでふくらみ、その後フロムによっても部分的に手直しされていた。フロムは当初、この記録原稿を使って、精神分析的セラピーに関する一冊の本をまとめあげようと思っていた。その本の第一部は、フロイト派の理解の限界を扱うものとして構想されていた。そのための原稿を、フロムは『生きる (To Live or To Be?)』(To Have or To Be?) を書き終えた後、一九七六年と一九七七年に書いている。第二部は、セラピーの方法に関する諸問題を扱うものとして、フロムが一九七四年のセミナーの記録原稿を修正し、あためていたものであった。ところが、フロムは一九七七年の秋にひどい心臓発作に見舞われ、この作業を続行することが困難になってしまった。そのため、フロイトの精神分析を論じた第一部は、結局、第二部として予定されていた部分とは切り離され

て、一九七九年に出版された (E. Fromm, 1979a を参照)。

一九七四年のセミナーの記録原稿の、本書に収められた抄録は、セラピストとしてのフロムに関する一次資料を提供してくれる(とりわけ情報を豊かなものとしているのは、バーナード・ランデイスがセミナーで取り上げた症例報告に対してフロムが示した所見である)。さらにそれだけでなく、近代の性格神経症をフロムがどう見ていたか、またその処置にあたってどのような事柄が特別に要請されると考えていたかの一次資料にもなっている。一九七四年のセミナーの章のいくつかは、前述の一九六三年のインタビューでのフロムの発言によって拡充されている。最後の章は、一九八〇年の死の直前に書かれたものであり、フロム自身の手によって「精神分析的『技法』」——あるいは耳を傾けるといふ「<sup>アクト</sup>技」と題されている。これは、一九七四年のセミナーの一部を公刊する際の導入部分として書かれたものである。

一九九四年一月 テュービンゲンにて

ライナー・フンク